

卷第二 述太陽病

太陽病者、表熱證、是也、蓋邪之初感、必先犯^レ表、則正氣不^レ暢、併而為^レ熱、

太陽病とは、表熱證、是也、蓋し邪の初感、必ず先ず表を犯せば、則ち正氣暢^{ゆきわたらず}、併^{あわせて}して熱を為す、

山田正珍注^{提綱}曰、頭項強痛、謂^二頭痛項強^一、瓜蒂散條云、病如^二桂枝證^一、頭不^レ痛項不^レ強、可^二以^レ徵^二焉^一、此條統^二論中風傷寒^一、故啻云^二脈浮^一、而不^レ分^二緊與^レ緩也、惡寒亦兼^二惡風^一言、惡風輕、惡寒重、舍^レ輕取^レ重、所^レ謂舉^レ大而小從者也、其不^レ言^二發熱^一者、以^レ有^下或已發熱或未^二發熱^一之異^上也、此説為^レ是、

山田正珍^{「傷寒論集成」}提綱^{太陽病上篇一條*}に注して曰く、頭項強痛、頭痛項^{くびすじ}強^{こわばる}を謂う、瓜蒂散條^{太陽病下篇}云「病如桂枝證、頭不痛項不強、」以て徴とすべし焉、此條中風傷寒を統論総論をすべて括って説くことす、故に啻^{ただ}脈浮と云つて、緊と緩とに分けず也、「惡寒」亦惡風を兼ねて言う、惡風輕、惡寒重、輕きを舍^{おき}重きを取る、謂う所の大を舉^{挙げ}て小從う者也、其發熱を言わざるは、「或已發熱、或未發熱」の異^{區別}有るを以て也と、此説是と為す、

* 提綱 太陽病上篇第一條「太陽之為病、脈浮、頭項強痛而惡寒、」

参考 二條「太陽病、發熱、汗出、惡風、脈緩者、名為中風、」

三條「太陽病、或已發熱、或未發熱、必惡寒、體痛、嘔逆、脈陰陽俱緊者、名為傷寒、」

此病大端有^レ二、一則其人腠理素疎者、倘被^二邪客^一、其表愈開、邪不^二內迫^一、徒泛^二漫肌肉^一、故衛特受^レ傷、

此病大端^{大体}二つ有り、一は則ち其人腠理素^もとから^疎者、倘^{もし}邪客を被^{こうむ}れば、其表愈^いよいよ開き、邪が内迫せず、徒^{いた}ずらに肌肉に泛^汎漫^{一面に広がる}、故に衛特に傷^敗を受ける、

觀^二衛氣不^レ與^二營氣^一和諧^上、及營弱衛強等語^甲、則中風之邪、不^レ著^二營分^一也明矣、

衛氣が營氣と和諧^{調和*}せず、及び營弱衛強等の語^{**}を觀れば、則ち中風の邪、營分に著^つかざる也^は明矣、

* 太陽病中篇二十三條「病常自汗出者、此為營氣和、營氣和者、外不諧、以衛氣不共營氣諧和故爾、以營行脈中、衛行脈外、復發其汗、營衛和則癒、宜桂枝湯、」

** 太陽病中篇六十七條「太陽病、發熱、汗出者、此為營弱衛強、故使汗出、欲救邪風者、宜桂枝湯、」

是屬^二表虛^一、

是表虛に属する、

虛者、疎洩^{泄の別体・ひらきもらす}之義、非^二虛乏^一虛、

虛とは、疎洩^{泄の別体・ひらきもらす}の義^{すきまの意味}、虛乏^{欠乏}の虚に非ず、

所^レ謂名為^二中風^一者矣、治以^二桂枝湯^一、調^二和營衛^一、而汗^二解之^一、

謂う所の名を中風と為す者矣、治するに桂枝湯を以てす、營衛を調和して、汗して之を解す、

尤怡醫學讀書記曰、傷寒發熱者、陽氣被^レ鬱而不^レ伸也、中風發熱者、陽氣被^レ引而外浮也、

鬱者必發^レ之、浮者不_レ徒解散_レ而已、此桂枝湯、所_レ以兼_レ陰陽_レ通_レ合散_レ為^レ劑也、

尤怡醫學讀書記曰く、傷寒發熱は、陽氣が鬱^{むす}ぼれて伸びず也、中風發熱は、陽氣が引ひきつられて外浮する也、鬱れる者は必ず之を發し、浮は徒^{いた}ずらに解散^{わか}れはなれるせざる而已^{のみ}と、此桂枝湯、以て陰陽を兼ね合^集散に通じ、劑^劑と為す所也、

一則其人腠理素緻者、邪正相搏、更致_レ緊閉_レ、遂迫_レ骨節_レ、故營衛俱傷、

一は則ち其人腠理素緻^密者、邪正相搏、更に緊閉を致し、遂に骨節に迫る、故に營衛俱に傷^{やぶ}れる、

觀_レ營衛俱病、骨節煩疼條_レ、則傷寒之邪、亦傷_レ衛分_レ也明矣、

營衛俱病、骨節煩疼の條^{*}を觀れば、則ち傷寒の邪、亦衛分を傷る也^や明らか矣、

*辨脈法二十三條「寸口脈浮而緊、浮則為風、緊則為寒、風則傷衛營、營衛俱病、骨節煩疼、當發其汗也、」

是屬_レ表實_レ、

是表實に屬す、

實者、緊閉之義、非_レ結實之實_レ、

實は、緊閉^{かたくふさが}るの義^{意味}、結實^みの實に非ず、

所^レ謂名為_レ傷寒_レ者矣、

謂う所の名を傷寒と為す者矣、

尤氏曰、不^レ言^レ無^レ汗者、以_レ脈緊_レ該^レ之也、

尤氏曰く、汗無しと言わざる者、脈緊を以て之を該^かねる也、

治以_レ麻黃湯_レ、發_レ洩鬱陽_レ、而汗_レ解_レ之_レ、

治に麻黃湯を以て、鬱陽を發洩^泄・發^しもれることとして、之を汗解す、

麻黃為_レ汗藥中之最烈者_レ、金匱^{痰飲欬嗽病篇}茶甘五味加薑辛半夏湯條曰、麻黃發_レ其陽_レ、蓋發陽二字、實盡_レ其功用_レ、不^レ待_レ李時珍發_レ散肺經火鬱_レ之說_レ也、其得_レ桂枝_レ、而發^レ表^更銳者、猶大黃之於_レ芒消_レ耳、金匱又曰、其人形腫者、加_レ杏仁_レ主^レ之、其證應^レ內_レ麻黃_レ、以_レ其人_レ遂^レ痺_レ、故不^レ內^レ之、掎^レ此、杏人之與_レ麻黃_レ、唯有_レ緊慢之別_レ、而其開^レ鬱^則稍均、不_レ特^レ為^レ治^レ喘^而用_レ也、且此方之妙、固在_レ單捷_レ、所_レ以不^レ用_レ薑棗等品_レ、柯氏說雖^レ密、至_レ大青龍_レ而不^レ通矣、

麻黃は汗藥中の最も烈^{はげ}しき者と為す、金匱^{痰飲欬嗽病篇}茶甘五味加薑辛半夏杏仁湯條^{*}曰く「麻黃發其陽」蓋し發陽二字、實に其功用を盡くす、李時珍^{本草綱目}明代の肺經の火鬱を發散するの說を待たざる也、其桂枝を得て、表を發するは^更に銳き者、猶大黃の芒消に於けるがごとき耳、金匱又曰「其人形腫者、杏仁を加え之を主る、其證應に麻黃を内れ、以其人遂に痺するを以ての故に、之を内れず、」此に掎れば、杏仁と麻黃、唯緊慢の別有りて、其鬱を開くは則ち稍^{やや}均^{ひと}しい、特^{ひとり}喘を治するを為すとして用いざる也、且此方の妙、固く單^{ひと}つに捷^敏捷^捷に在り、薑棗等の品を用いざる所以^{ゆえん}、柯氏說密^密と雖も、大青龍に至っては通ぜず矣、

*金匱痰飲欬嗽病篇十二・茶甘五味加薑辛半夏杏仁湯條「(茶甘薑味加辛夏湯の服後)水去嘔止、其人形腫者、加杏仁主之、其證應内麻黃、以其人遂痺、故不内之、若逆而内之者、必厥、所以然者、以其人血虚、麻黃發其陽故也、」

此其分也、

詳此二證、朱氏成氏主風寒營衛相配之說、爾來諸家、無復異議、迄至柯氏、辨駁殆盡、而張志聰實關其端、說見集注凡例、及侶山堂類辨、惜語焉未詳耳、尤氏曰、邪氣之來、自皮毛而入肌肉、無論中風傷寒、未有不及於衛者、其甚者、乃并傷于營耳、郭白雲所謂涉衛中營者、是也、亦為明確、今攷郭氏猶分風寒、然其言頗精、仍拈于左、曰、問曰、太陽一經、何其或有汗、或無汗也、雍曰、繫乎營衛之氣也、營行脈中、衛行脈外、亦以內外和諧、而後可行也、風邪之氣、中淺則中衛、中衛則衛強、衛強不與營相屬、其剽悍之氣、隨空隙而外出、則為汗矣、故有汗者、衛氣遇毛孔而出者也、寒邪中深、則涉衛中營、二氣俱受病、無一強一弱之證、寒邪營衛、相結而不行、則衛氣無自而出、必用藥發其汗、然後邪去而營衛復通、故雖一經有汗無汗二證、亦有桂枝解表、麻黃發汗之治法不同也、

此の二證を詳つまびらかにするに、朱氏成氏は風寒營衛相配するの説を主とする、爾來^{それ}諸家、復^{さら}に異議無し、柯氏に至る迄、辨駁^{ベンバク・反論}殆ど盡きけれども、張志聰實に其端を關^{ひら}く、説は集注凡例、及び侶山堂類辨に見える、惜しむらくは語焉^{これ}より未だ詳しからず耳、尤氏曰く、邪氣の來、皮毛自^{より}肌肉に入る、中風傷寒を論ぜず、未だ衛に及ばざる者有らず、其甚だしき者、乃ち并^あわせて營を傷^{やぶ}る耳、郭白雲^{郭雍「傷寒補亡論」宋代}、謂う所の衛を涉^へて營に中^{あた}る者、是也、亦明確を為す、今攷^考するに郭氏猶風寒を分ける、然して其言頗る精、仍ち左^下に拈^引用、曰く、問曰く、太陽一經、何ぞ其或いは汗有り、或いは汗無し也^や、雍^{郭雍}曰く、營衛の氣に繋がる也、營は脈中を行き、衛は脈外を行く、亦内外和諧^{調和}を以て、後行くべき也、風邪の氣、淺く中^{あた}れば則ち衛に中たる、衛に中れば則ち衛強^{さかん}、衛強は營と相屬^結さず、其剽悍^{ヒョウカン・すばやくあらあらしい}の氣、空隙に隨いて外出すれば、則ち汗を為す矣、故に汗有る者、衛氣毛孔に遇^あつて出る者也、寒邪深く中^{あた}れば、則ち衛を涉^へて營に中たる、二氣^{營衛}俱に病を受け、一強一弱の證無し、寒邪營衛、相結びて行^{めぐ}らざれば、則ち衛氣自らにして出さず、必ず藥を用い其汗を發す、然る後邪去りて營衛復通ず、故に一經に有汗無汗の二證有りと雖も、亦桂枝表を解し、麻黃汗を發するの治法に不同有る也、

○桂麻二湯、其證不一、今僅舉大較、後柴胡承氣等類、皆准此、

○桂麻二湯、其證一ならず、今僅かに大較^{大略}を擧げる、後ち柴胡承氣等類、皆此に准^準ず、

就中^{なか}んずく輕重、更有^ち等差、有^下表虛經日不愈、以致邪鬱^{者上}、有^下表虛重一等、血氣俱乏者、有^下表虛重一等、邪著^{筋脈者上}、有^下表實輕一等、邪著^{筋脈者上}、有^下表實重一等、熱勢更甚者、大抵隨其人強弱為^異、今具論于左、

就中^{なか}んずく輕重、更に等差^{ちが}い有り、表虛は日を経て愈えず、以て邪鬱を致す者有り、表虛重き一等、血氣俱に乏しき者有り、表虛重き一等、邪が筋脈に著^つく者有り、表實輕き一等、邪が筋脈に著^つく者有り、表實重き一等、熱勢更に甚だしき者有り、大抵其人の強弱

に随い異_{區別}を為す、今左_下に具論_{充分に論議をつくす}、

仲景既以_二風寒_一為_二表虛實_一之目_一、而更有_二表虛冒_一傷寒_一、有_二表實冒_一中風_一、蓋是互文見_レ意、在_レ使_二人不實_一講邪氣_一、故今所_二區分_一、一就_二其證_一、以_二虛實_一為_レ等、至_二冒頭之義_一、則卷末答問中詳_レ之矣、

仲景既に風寒を以て表虛實の目_{かなめ}と為して、更に表虛傷寒に冒_干・おかされる有り、表實中風に冒される有り、蓋し是互文_{二つの文で互いに相通じ相補って意味を全うする書き方で}意味を見_{あらわす}、人をして邪氣に實講_{和解}なからしむるに在り、故に今區分する所、一_{すべて}其證に就き、虚實を以て等_{ひとしい}と為し、冒頭の義に至っては、則ち卷末答問中之を詳_{つまびらかに}にする矣、

○方氏以_二桂麻青龍三證_一、為_二太陽三綱_一、諸家多沿_二其誤_一、特柯氏極排_二斥之_一、更有_二明辨_一、今摘_二出之_一、以備_二于攷_一、曰、按許叔微云、桂枝治_二中風_一、麻黃治_二傷寒_一、大青龍治_下中風見_二寒脈_一、傷寒見_中風脈_上、三者如_二鼎立_一、此方氏三大綱所_二由来_一、而大青龍之證治、自_レ此不_レ明_二於世_一矣、不_レ知_レ仲景治_レ表、只在_二麻桂二法_一、麻黃治_二表實_一、桂枝治_二表虛_一、方治在_二虛實上_一分、不_中在_二風寒上_一分_上也、蓋風寒二證、俱有_二虛實_一、俱有_二淺深_一、俱有_二營衛_一、大法又在_二虛實上_一分_二淺深_一、並不_下在_二風寒上_一分_中營衛_上也、夫有_レ汗為_二表虛_一、立_二桂枝湯_一、治_二有_レ汗之風寒_一、而_レ更_二有_レ加桂、去桂、加芍、及加附子、人參、厚朴杏仁、茯苓白朮、大黃、龍骨牡蠣等劑_一、皆是桂枝湯之變局、因表虛中_レ更_二有_レ内虚内實淺深之不_レ同、故加減法亦種種不_レ一耳、以_レ無_レ汗為_二表實_一、而立_二麻黃湯_一、治_二無_レ汗之風寒_一、然表實中亦有_二夾_レ寒夾_レ暑内寒内熱之不_レ同、故以_二麻黃_一為_レ主、而加減者、若_二葛根湯、大小青龍、麻黃附子細辛甘草、麻黃杏仁甘草石膏、麻黃連翹赤豆等劑_一、皆麻黃湯之變局、因_二表實中亦各有_二内外寒熱淺深之殊_一也、葛根湯、因_二肌肉津液不_レ足、而加_二葛根_一、大青龍、因_二内熱煩躁_一、而加_二石膏_一、小青龍、以_二乾嘔而欬_一、而加_二半夏細辛乾薑_一、麻黃附子細辛二方、以_二脈沈_一而加_二附子_一、若_二連翹赤豆梓皮_一、濕熱發黃而加、諸劑皆因_二表實_一、從_二麻黃湯加減、何得_レ獨推_二大青龍_一為_中鼎立_上耶、蓋中風傷寒、各有_二淺深_一、或因_二人之強弱而異、地之高下而異、時之乖_レ和而異、以上柯說、攷千金翼方曰、尋_二方之大意_一、不_レ過_二三種_一、一則桂枝、二則麻黃、三則青龍、此之三方、凡療_二傷寒_一、不_レ出_レ之也、然則三綱之說、自_二孫氏_一作_二其備_一、而如_二方氏_一實本_二于朱氏成氏之言_一、今柯氏歸_二咎于許氏_一、不_レ檢之甚矣、又校大青龍條、外臺所_レ引、中風見_二傷寒脈_一者可_レ服_レ之者、恐王氏斷_レ章取_レ義、非_二唐時旧本有_二此文_一也、

○方氏_{方有執}「傷寒論條辨」_{明代}桂_枝麻_黃青龍の三證を以て、太陽三綱_{かなめ}と為す、諸家多く其誤に沿_{そう}、特_{ひとり}柯氏_{柯琴}「傷寒論註來蘇集」_{清代}極_{激しく}之を排斥、更に明辨_{はっきりみわけ}る有り、今之を摘_{つまみだ}す、以て攷_考に備_備える、曰く、按ずるに許叔微_{晋濟本事方}宋代云う、桂枝は中風を治し、麻黃は傷寒を治す、大青龍は中風に寒脈を見、傷寒に風脈を見るを治す、三者鼎_{かなえ}・三本脚_{の青銅器}を立てるが如し、此方氏三大綱に由来する所にして、大青龍の證治、此自より世に明_あきらかならざる矣、仲景表を治すに、只麻桂二法に在り、麻黃表實を治し、桂枝表虚を治す、方治は虚實上に在る分_{區別}、風寒上に在る分にはあらざる也、蓋し風寒二證、俱に虚實有り、俱に淺深有り、俱に營衛有り、大法_{重要な法則}又虚實上に在り淺深に分ける、並_{みな}風寒上に在

っては營衛を分けざる也、夫汗有り表虚と為し、桂枝湯を立て、汗有るの風寒を治して、
 更に加桂、去桂、加芍薬、及び附子、人參、厚朴杏仁、茯苓白朮、大黃、龍骨牡蠣等劑に
 有り、皆是桂枝湯の變つた局^{はたらき}、因つて表虚中更に内虚内實淺深の不同有り、故に加
 減法亦種種一ならざる耳、汗無きを以て表實と為して、麻黄湯を立て、無汗の風寒を治す、
 然れども表實中亦寒を夾み暑を夾み内寒内熱の不同有り、故に麻黄を以て主と為して、加
 減するもの、葛根湯、大小青龍、麻黄附子細辛甘草、麻黄杏仁甘草石膏、麻黄連翹赤豆等
 の劑の若^{ごと}し、皆麻黄湯の變つた局^{はたらき}、表實中亦各内外寒熱淺深の殊^異有るに因る也、
 葛根湯、肌肉津液不足に因つて、葛根を加える、大青龍、内熱煩躁に因つて、石膏を加え
 る、小青龍、乾嘔して欬するを以て、半夏細辛乾薑を加える、麻黄附子細辛二方、脈沈を
 以て附子を加える、連翹赤豆^{あずさ}皮の若^{ごと}き、濕熱發黄にて加える、諸劑皆表實に因る、
 麻黄湯加減に従う、何ぞ獨り大青龍を推して鼎^{かなえ}と為し立てるを得ん耶や、蓋し中風傷寒、
 各淺深有り、或いは人の強弱にて異なり、地^{土地}の高下にて異なり、時^{四時}の和に乖^{そむ}いても
 異なるに因ると、以上柯説、攷^考するに千金翼方曰く、方の大意を尋ねるに、三種を過ぎず、
 一は則ち桂枝、二は則ち麻黄、三は則ち青龍、此の三方、凡そ傷寒を療するに、之を出さ
 る也、然れば則ち三綱の説、孫^{千金方・千金翼方の著者孫思邈}氏自^{より}其^僦ヨウ・ひとがたを作れども、方氏
 の如き實に朱氏成氏の言を本にす、今柯氏は許氏に帰咎^{キキユウ・罪を帰す}するも、之を検^{しら}べざ
 ること甚だし矣、又^校案^{ずる}に大青龍條、外臺引く所^{*}の、中風に傷寒の脈を見る者之を服
 すべきとは、恐らく王氏^{王燾「外臺秘要方」唐}斷^章文の中からその一部を取つてくるして義を取る、唐時日本
 に此文有るに非ざる也、

*外臺二卷傷寒中風方九首「大青龍湯療太陽中風脈浮緊云云」傷寒論太陽中篇八條と同

有_下表虚經^レ日不^レ愈、以致_下邪鬱_上者、何、桂枝麻黄各半湯、桂枝二麻一湯、桂枝二越婢
 一湯證、是也、其證輕重不^レ均、故有_下三方之設_上焉、蓋桂枝證、失^レ汗數日、邪鬱_レ肌肉_上、
 故熱多寒少、其滯稍深、故如_下瘧狀_上、發作有^レ時、但本是表虚、故有^レ嫌_レ麻葛之發_上、今
 則鬱甚、有_下桂枝之力、不^レ能^レ及_上者、是以酌_下量麻桂二方_上、言_下日二三發者_上、其邪稍重、
 言_下日再發者_上、其邪稍輕、不^レ言_下發數者_上、其邪尤重、且桂枝二越婢一、其力緊、桂二麻
 一、其力慢、桂麻各半、在_下緊慢之間_上矣、

表虚が日を経るに愈えず、以て邪鬱を致す者有り、何ぞや、桂枝麻黄各半湯、桂枝二麻
 黄一湯、桂枝二越婢一湯證、是也、其證輕重均^{ひと}しからず、故に三方の設^{用意}有り焉、蓋し
 桂枝證、汗を失い數日、邪が肌肉に鬱^{むす}ばれる、故に「熱多寒少」其滯^{とど}こおり稍^{やや}深い、
 故に「如瘧狀」發作時有り、但し本是表虚、故に麻^{黄湯}葛^{根湯}の發を嫌う有り、今則ち鬱甚だ
 しく、桂枝の力、及ぶ能わざる者有り、是以て麻^{黄湯}桂^{枝湯}二方を酌量、「一日二三發」^{桂麻各半}
 者と言う、其邪稍重い、「一日再發者」^{桂枝二麻黄一湯}と言う、其邪稍軽い、發數を言わざる者、
 其邪尤^もつとも重く、且^{まさ}に桂枝二越婢一、其力緊^{つよい}、桂二麻一、其力慢^{ゆるやか}、桂麻各半、
 緊慢の間^間に在り矣、

此三條、其意互發、各半湯、其證特審、他二條、則文甚略矣、蓋各半湯條、八九日者、約
 略言^レ之之辭、而二條亦冒^レ之、發熱惡寒、熱多寒少、三證疊言、而麻一湯、省_下寒熱_上、但

言^レ如^レ瘧條狀^一、越婢一湯、言^レ寒熱^一、而省^レ如^レ瘧狀^一、其人不^レ嘔、清便自可、亦二條所^レ蘊、如^レ瘧狀^一、疑^レ于少陽證^一、故別以^レ不^レ嘔、熱多疑^レ于陽明證^一、故別以^レ清便自可^一、欲^レ自可^一之欲字、當^レ從^レ玉函^一芟去為^レ是、一日二三四度發、與^レ脈微緩者^一、文勢一串、故以^レ為^レ愈候^一、然照^レ麻一湯^一、實是表鬱所^レ致、宜^レ接^レ面色反有^レ熱色^一者^一看^レ、攷面赤證、參^レ二陽併病、面色緣緣正赤、及陽明病面合赤色、當^レ是表鬱兼^レ裏熱^一者使^レ然、今但表鬱而有^レ之、故下一反字、不^レ得^レ小汗出^一者、言得^レ病以來、未^レ曾小小發^レ汗、故致^レ此表鬱^一、且身癢也、更發^レ汗更吐更下、三更字、當與^レ反字^一同^レ義、桂二麻一湯證、嘗經^レ大汗^一、亦是失治、然幸無^レ入陽之變^一、亦不轉^レ屬陽明^一、猶纏^レ滯表分^一、累日不^レ解、但以^レ其既汗^一、比^レ之^レ二證^一、則鬱為^レ輕、龐氏於^レ脈洪大下^一、補^レ證候不^レ改四字、與^レ玉函但字^一、其義相發、桂二越婢一湯證、其熱最重、猶^レ麻黃之有^レ大青龍^一、假^レ石膏之力^一、以越散^レ鬱陽^一、脈微弱者不^レ可^レ發^レ汗者、蓋戒^レ此方之不^レ可^レ輕用^一、與^レ各半湯之脈微而惡寒、大青龍之脈微弱^一同^レ例、乃係^レ倒筆法^一、但此條文甚約、故諸家不^レ察及^レ、特中西惟忠注、稍為^レ近^レ之、惜猶欠^レ明暢^一、要^レ之此三條、從未^レ見^レ確解^一、如^レ方氏^一以為^レ兩傷輕證^一、尤屬^レ錯謬^一、唯內臺方議各半湯下曰、桂枝湯治^レ表虛^一、麻黃湯治^レ表實^一、二者均曰^レ解^レ表、霄壤之異也、今此二方、合而用^レ之者、乃解^レ其表不^レ虛不^レ實者^一也、八九日不^レ已、反如^レ瘧狀^一者、乃先發^レ表不^レ盡、微滯^レ於經^一、而不^レ得^レ出、故一日二三四度發也、斯說殊妥、然猶未^レ為^レ精審^一、今以^レ經釋^レ經、非^レ敢好^レ異也、唐不巖對^レ論三方^一云、總是一太陽病、病與^レ時日、有淺與^レ深、脈與^レ形證^一、有^レ應與^レ否、權衡劑量、不^レ失^レ銖黍^一、於^レ此見^レ古人立^レ方之妙^一、此言為^レ然、

此三條*、其意互に發明^レらかにするす、各半湯は、其證特に審^レくわしい、他二條は、則ち文甚だ略簡略^一矣、蓋し各半湯條の「太陽病得之八九日」は、約略^レあらし之を言うの辭にして、他二條亦之を冒^レかぶせる・冒頭^一す、「發熱惡寒、熱多寒少」は三證疊^レかさねる言なれども、麻一湯^一桂枝二麻黃一湯は、寒熱を省き、但だ瘧狀の如き「若形如瘧」と言う、越婢一湯^一桂枝二越婢一湯は、寒熱を言いいて、瘧狀の如きを省く、桂麻各半「其人不嘔、清便自可」、亦^レ他の二條蘊^レウん・鬱結する所、桂麻各半「如瘧狀」少陽證を疑うが、故に別に「不嘔」を以てす、「熱多」は陽明證を疑うが故に、別に「清便自可」を以てす、條文の「清便欲自可」の「欲」字、當に玉函に従い芟^レサン・刈去するを是と為す、「一日二三四度發」は「脈微緩」と、文勢一串^一イツセン・ひとさし、故に愈る候を為すに似る、然れども麻一湯^一桂枝二麻黃一湯を照^レてらしあわせるに、實に是表鬱の致す所、宜しく「面色反有熱色者」に接^レつなると見るべし、面赤證を攷^レ考すると、太陽中十八條「二陽併病・・面色緣緣正赤」、及び陽明二十七條「陽明病、面合赤色」を參^レくらべあわすし、當に是表鬱で裏熱を兼ねる者然らしむるべし、今但表鬱にして之有あり、故に一「反」字を下す、「不得小汗出」者、言^レいうところは病を得て以來、未だ曾て小小^一わずかばかりの汗も發せず、故に此表鬱を致す、且「身癢^一痒・かゆい」也、「更發汗更吐更下」の三「更」字、當に「反」字と同義、桂二麻一湯證、嘗て大汗を経る「大汗出」、亦是失治、然れども幸い入^レ陽の變無し、亦陽明に轉属せず、猶表分に纏^レテン・まとう滯^一ここおる、累日^一幾日も解せず、但だ其既に汗を以てす、之を二證に比すれば、則ち鬱輕と為す、龐氏「桂枝二麻黃一湯條脈洪大」下に、證候不改の四字補う、玉函「脈但洪大」字と、其義相

發明らかにするす、桂枝二越婢一湯證、其熱最も重し、猶麻黃の大青龍有るがごとく、石膏の力を假り、以て鬱陽を越ちらす散、太陽中八條大青龍湯「・・脈微弱者・・不可發汗・・」は、蓋し此方の輕用輕々しく用いるすべからざるを戒める、各半湯の「脈微而惡寒」と、大青龍の「脈微弱」同例、乃ち倒筆法に係わる、但此條文甚だ約簡單、故に諸家察し及ばず、特に中西惟忠注、稍之に近いと為すも、惜しむらくは猶明暢論旨がはつきりとのびて通っているを欠く、之を要するに此三條、従つて未だ確かな解を見ず、方氏の如き以て兩傷輕證と為す、尤も錯謬に屬す、唯だ内臺方議許弘「金鏡内臺方議」清代各半湯下に曰う、桂枝湯治表虛、麻黃湯治表實、二者均しく表を解すると曰うも、霄壤ショウジョウ・天地の異也、今此二方、合して之を用いるは、乃ち其表虛ならず實ならざるものを解す也、桂麻各半の八九日不已、反如瘧狀は、乃ち先ず表を發し盡くさず、微ひそかに經に滯とどこりて、出るを得ず、故に「桂麻各半一日二三度發」する也と、斯この説殊ことに妥あ当、然れども猶未だ精審くわしくつまびらかを為さず、今經を以て經を釋とく、敢えて異を好むに非ざる也、唐不巖が三方に對論して云う、総すべては一おなじ太陽病、病は時日日時と與ともに、淺と深と有り、脈は形證と與に、應と否と有り、權衡はかる劑量、銖黍シュジョ・サを失せず、此に於いて古人方を立てるの妙を見ると、此言然りと為す、

*此三條

太陽上二十三條「太陽病 得之八九日 如瘧狀 發熱惡寒 熱多寒少 其人不嘔 清便欲自可 一日二三度發 脈微緩者 為欲癒也 脈微而惡寒者 此陰陽俱虛 不可更發汗 更下 更吐也 面色反有熱色者 未欲解也 以其不能得小汗出 身必痒 宜桂枝麻黃各半湯」

太陽上二十五條「服桂枝湯 大汗出 脈洪大者 與桂枝湯 如前法 若形如瘧 一日再發者 汗出必解 宜桂枝二麻黃一湯」

太陽上二十七條「太陽病 發熱惡寒 熱多寒少 脈微弱者 此無陽也 不可更汗 宜桂枝二越婢一湯」

有表虛重一等、血氣俱乏者、何、傷寒脈浮、自汗出、小便數、心煩微惡寒、脚攣急、是也、此證不啻表疎、其人陽津素少、故雖桂枝本湯、猶過其當、蓋與少陰直中、稍稍近似、而不比彼之寒盛、故雖經誤汗、僅須甘薑、而陽回之後、或變胃燥、若其重誤治、則變為純陰證也、

表虛重き一等、血氣俱ともに乏しき者有り、何ぞ、「*傷寒脈浮、自汗出、小便數、心煩微惡寒、脚攣急・・」是也、此證ただ表疎ならず、其人陽津素もと少、故に桂枝本湯と雖も、猶其當を過ぎれば、蓋し少陰直中ジキチュウ・病邪が三陽經を経ずに直接三陰經を犯すと、稍稍だんだん近似よくにるすれども、少陰直中彼の寒盛には比ひとしからず、故に誤汗を経ると雖も、僅かろうじて甘草生薑を須もちいて、陽回の後、或いは胃燥に變じる、若し其重ねて誤治すれば、則ち變じて純陰證を為す也、

*傷寒論太陽上二十九條「傷寒脈浮 自汗出 小便數 心煩 微惡寒 脚攣急 反與桂枝湯 欲攻其表 此誤也 得之便厥 咽中乾 煩燥吐逆者 作甘草乾薑湯與之 以復其陽 若厥癒足温者 更作芍藥甘草湯與之 其脚即伸 若胃氣不和譫語者 少與調胃承氣湯 若重發汗 復加燒針者 四逆湯主之」

此條本證、次條擬以桂枝增桂加附子者、殊不無疑、何以言之、夫既為附子所宜、則誤汗便厥之際、不得經與四逆、而僅用單味小方、竊恐萬無其理、蓋

自汗出、小僂數、心煩等證、與_二傷寒二三日、心中悸而煩_一、稍同_二其情_一、而係_二從前虛乏、為_レ邪凌虐者_一、則是小建中所_レ主也、柯氏於_二未_レ發_レ汗之前_一、擬以_二芍藥甘草湯_一、尤氏謂此桂枝證、然陰虛而裏熱、當_レ以_二甘辛_一攻_レ表、而以_二甘寒_一顧_レ裏、乃反與_二桂枝湯_一、治_レ表而遺_レ裏、宜其得_レ之而僂厥也、二氏之說、亦有_レ所_レ見矣、尤氏於_二次條_一曰、中間語意、殊無_二倫次_一、此豈後人之文耶、舒氏亦曰、此條說_二一出許多無_レ益之語_一、何所_レ用_レ之、吾不_レ能_二曲為_レ之解_一也、並本_二于柯氏之刪_一也、

此條本證、次條擬_{おしはかる}に桂枝に桂を増し附子を加えるを以ての者、殊_{こと}に疑無きにあらず、何を以て之を言うか、夫既に附子宜しき所を為せば、則ち誤汗僂_便ち厥するの際、經ただちに四逆を與えざるを得ず、而_{しか}して僅かに單味の小方を用いる、竊_窃・切に恐らく萬_{けつ}して其理無し、蓋し「自汗出、小僂_便數、心煩」等の證は、太陽中七十六條「傷寒二三日、心中悸而煩_{小建中湯主之}」と、稍_{やや}其情_{寒熱虛實}を同じくして、從前_{以前}虛乏、邪が為に凌虐_{リョウギヤク}・ひどい目にあわせる者に係れば、則ち是小建中湯が主る所也、柯氏未だ汗を發せざるの前に、擬_{おしはかる}して芍藥甘草湯を以てすと、尤氏此桂枝證と謂う、然れども陰虛にして裏熱、當に甘辛_{桂枝湯}を以て表を攻め、甘寒_{調胃承氣湯}（大黃・甘草・芒消）を以て裏を顧みんとす、乃ち「反與桂枝湯」は表を治して裏を遺_{のこ}す、宜しく其之を得て僂_便ち厥すべし_{「得之便厥」}也、二氏の說、亦見る所有り矣、尤氏次條に於いて曰く、中間_問語意_{言葉の意味}、殊_{こと}に倫次_{順序次第}無し、此豈後人の文耶_かと、舒氏亦曰く、此條許多_{キョタ}・あまた益_益無きの語を説出_{申し出}る、何の所ぞ之を用いると、吾曲_{つぶさ}に之の解を為す能わず也、並柯氏の刪_{削除}を本とする也、

○趙氏論_二本條用_レ藥之意_一曰、以上用_レ藥次第、先熱後寒、先補後瀉、似_レ逆而實順、非_二仲景之妙_一、孰能至_レ是哉、後之學者、可_レ不_二以_レ此為_レ法、推廣而應_レ變、張鄉子曰、此條、見_二傷寒隋_一證用_レ藥、如_レ轉_レ圓法_一也、先教諭亦曰、金匱欬嗽、小青龍下已之後、叙_レ證五變、應_レ變加減、其意殆與_二此條_一同、示_レ人以通_レ變之法_一也、趙言、出_二汪氏選錄_一、頗為_二辨覈_一、文辭不_二具錄_一、

○趙氏本條に用藥の意を論じて曰く、以上用藥次第、先熱後寒、先補後瀉、逆に似れども實_まことに順、仲景の妙に非ざれば、孰_{たれ}か能く是に至らん哉、_{しかれども}後の學者、此を以て法とは為ざるべし、推廣_{推し広める}して變に應ずる、張鄉子曰く、此條、傷寒は證に隨いて藥を用い、轉圓_{轉円・凝滞のない喩え}の如き法を見る也と、先教諭亦曰く、金匱欬嗽「小青龍下已_{服藥}」の後、證を叙し五變*、變に應じて加減、其意殆んど此條と同、人に示すに變に通じるの法を以てする也と、趙言、汪氏選錄に出る、頗_{すこぶ}る辨覈_{ベンカク}・良否を區別するを為す、文辭_{おおい}具_{すべて}錄せず、

* 金匱欬嗽十二の五變

① 青龍湯下已、多唾口燥、寸脉沈、尺脉微、手足厥逆、氣從小腹上衝胸咽、手足痺、其面翕然熱如醉狀、因復下流陰股、小便難、時復冒者、與**茯苓桂枝五味甘草湯**。（茯苓・桂枝・甘草・五味子）治其氣衝。

② 衝氣即低、而反更欬、胸滿者、用桂苓五味甘草湯去桂加乾薑細辛、以治其欬滿、**苓甘五味薑辛湯**。（茯苓・甘草・乾薑・五味子・細辛）

③ 欬滿即止、而更復渴、衝氣復發者、以細辛乾薑為熱藥也、服之當遂渴、而渴反止者、為支飲也、支飲者、法當冒、

冒者必嘔。嘔者復内半夏。以去其水。桂苓五味甘草去桂加乾薑細辛半夏湯（茯苓・甘草・細辛・乾薑・五味子・半夏）

④水去嘔止。其人形腫者。加杏仁主之。其證應内麻黃。以其人遂痺。故不内之。若逆而内之者必厥。所以然者。以其人血虛。麻黃發其陽故也。苓甘五味加薑辛半夏杏仁湯（茯苓・甘草・五味子・乾薑・細辛・半夏・杏仁）

⑤若面熱如醉。此爲胃熱上衝熏其面。加大黃以利之。苓甘五味加薑辛半杏大黃湯（茯苓・甘草・五味子・乾薑・細辛・半夏・杏仁・大黃）

桂麻各半湯之脈微而惡寒、桂枝二越婢一湯之脈微弱、大青龍湯之脈微弱汗出惡風、蓋此類證也、有_下表虛重一等、邪著_上筋脈者、何、桂枝加葛根湯證、是也、其證一與_上桂枝_上同、啻項背強几几爲_レ異、項背者大筋之所_レ束、其几几然、即是邪著_上筋脈_上之徵、所_レ以_レ加_上葛根_上也、

桂麻各半湯の脈微にして惡寒、桂枝二越婢一湯の脈微弱、大青龍湯の脈微弱汗出惡風、蓋し此類證也、表虛重きこと一等、邪が筋脈に著_上つ_上く者有り、何ぞ、桂枝加葛根湯證、是也、其證一に桂枝と同、啻_上た_上だ_上項背強几几を異と爲す、項背とは大筋の束_上た_上ば_上ね_上る_上所、其几几然、即ち是邪が筋脈に著_上つ_上く_上徵、葛根を加える所以也、

提綱既言_上頭項強痛_上、則桂枝證、本有_上項強_上、然未_レ及_上背、且不_上几几然_上也、几几、王氏據_上赤寫_上几几_上爲_レ解、近來焦循撰_上毛詩補疏_上、亦有_上其說_上、然作_上短羽鳥_上釋者、於_上拘強之義_上、固爲_上襯著_上、二家所_レ辨、今不_上敢從_上、反汗出之反字、對_上葛根湯證_上言、蓋邪著_上筋脈_上、稍屬_上堅閉_上、宜_上以_上無_上汗_上爲_レ正、今表疎人、而邪著_上筋脈_上、故於_上汗出_上、下_上一反字_上矣、煮法去_上上沫_上三字宜削、是後人因_上方中有_上麻黃_上、而誤添者、陶隱居稱_上麻黃不_上掠_上去其沫_上、令_上人煩_上、又葛根芩連湯、無_上此字面_上、可_上以互徵_上、

提綱ことの主要な点を挙げたもの既に頭項強痛を言え、則ち桂枝證、本_上項強_上有り、然れども未だ背に及ばず、且几几然ならず也、几几、王氏赤寫_上几几_上の几几に據より解と爲す、近來焦循が毛詩補疏を撰、亦其說有り、然り短羽鳥と作_上し釋_上者、拘_上おさ_上え_上つ_上ける_上強_上こ_上わ_上ぼ_上る_上の義に於いて、固く襯著_上シ_上ン_上チャ_上ク_上・_上く_上つ_上つ_上ける_上を爲す、二家の辨ずる所、今敢えて従わず、「*反汗出」の反字、葛根湯證に対して言う、蓋し邪が筋脈に著_上つ_上く、稍堅閉に屬す、宜しく無汗を以て正と爲す、今表疎の人にして、邪が筋脈に著_上つ_上く、故に汗出に於いて、一反字を下す矣、煮法に「去上沫」三字宜しく削_上け_上ず_上る_上べし、是後人方中に麻黃有るに因り、誤って添える者、陶隱居_上陶弘景_上は麻黃其沫を掠去せずば、人を煩せしむと稱_上稱_上する、又葛根_上黃_上芩_上黃_上連湯、此字面_上去_上上沫_上無く、以て互いに徵とすべし、

*太陽上十四條「太陽病 項背強几几 反汗出惡風者 桂枝加葛根湯主之、 右七味・・去上沫・・」

○上節證、與_上此節證_上、俱爲_上表虛重一等_上、但彼則病近_上于虛_上、此則病近_上于實_上、又此證、宜_上次_上于各半湯等證前_上、今列_上于此_上者、在_上使_上下_上人與_上葛根湯證_上、相對看_上上_上耳、

○上節證、此節證と、俱に表虛重きこと一等を爲す、但彼則ち病が虚に近い、此則ち病が實に近い、又此證、宜しく各半湯等證前に次_上列_上すべきも、今此に列するは、人をして葛根湯證と、相對して看せしむるに在る耳、

有_上下_上表實輕一等、邪著_上筋脈_上者、何、葛根湯證、是也、蓋其人表氣稍實、必須_上麻黃之發_上、然邪未_レ迫_上骨節_上、而猶著_上筋脈_上、是病在_上桂麻二證之間_上、故酌_上量_上二湯_上、以爲_上之

治_レ也、

表實輕きこと一等、邪が筋脈に著く者有り、何ぞ、葛根湯證、是也、蓋し其人表氣稍實、必ず麻黃の發を須_レもちいる、然り邪未だ骨節に迫らずして、猶筋脈に著く、是病は桂麻二證の間に在り、故に二湯を酌量、以て之が治を為す也、

葛根、柯氏說極當、然為_レ有_レ和_レ裏之功_レ者、殆不_レ然、蓋為_レ發表中之涼藥_レ、故能生_レ津液_レ、而舒_レ筋脈_レ也、本草、圖經云、張仲景治_レ傷寒_レ、有_レ葛根及加半夏、葛根黃芩黃連湯_レ、以_レ其主_レ大熱_レ解_レ肌開_レ腠理_レ故也、

葛根、柯氏說極めて當_レ中、然れども以て裏を和するの功有ると為すは、殆ど然らず、蓋し發表中の涼藥と為す、故に能く津液を生じて、脈を舒_レゆるやかにす也、本草圖經_レ唐代云う、張仲景傷寒を治するに、葛根_レ葛根湯及び加半夏_レ葛根加半夏湯、葛根黃芩黃連湯有り、其大熱を主り肌を解き、腠理を開くを以ての故也と、

有_レ表實重_レ一等、熱勢加甚_レ者_レ、何、大青龍湯證、是也、其候一與_レ麻黃證_レ相同、

表實重きこと一等、熱勢加_レますます甚_レだしき者有り、何ぞ、大青龍湯證、是也、其候一に麻黃證と相同、

不_レ言_レ喘者、蓋省文也、

喘を言わざるは、蓋し省文也、

但煩躁為_レ彼所_レ無、

但煩躁は彼に無き所と為す、

徐大椿曰、凡辨_レ證必於_レ獨異處_レ著_レ眼、是、山田正珍曰、不_レ汗出_レ、言_レ雖_レ服_レ麻黃_レ、而不_レ汗出_レ、與_レ無_レ汗_レ別、存_レ攷、

徐大椿曰く、凡そ證を辨ずるに必ず獨り異なる處に着眼すと、是とする、山田正珍曰く、大青龍湯の「不汗出」は、麻黃を服すと雖も、汗出せざるを言う、「無汗」とは別_レ區別有りと、攷考を存_レ温存す、

此表熱極鬱、内氣不_レ能_レ宣達_レ、則有_レ麻黃湯力不_レ能_レ及、故加_レ石膏之涼_レ、藉以發_レ越_レ之_レ、

此表熱極鬱、内氣が宣達_レふれ達すを能くせざれば、則ち麻黃湯力及ぶ能わず有多し、故に石膏の涼を加え、藉_レ借りて以て之を發越_レ外へ發散す、

此證惡寒而無_レ渴、可_レ知_レ非_レ裏有_レ熱者_レ、石膏雖_レ治_レ裏尙與_レ麻黃_レ配用、則相藉以走_レ表分_レ、而散_レ其壅鬱_レ、如_レ越婢湯_レ、亦為_レ然、要此湯證、於_レ太陽中_レ、病為_レ最重_レ、故不_レ得_レ不_レ倍_レ用麻黃_レ、唯其熱極鬱甚、單用_レ麻桂_レ、必有_レ兩陽相格之虞_レ、故佐以_レ石膏_レ、則鬱開熱潰、作_レ汗而解、蓋龍升雨降之妙、在_レ溫涼相併處_レ、柯氏所_レ解、迥勝_レ前注_レ、然猶未_レ為_レ盡、尤氏醫學讀書記曰、大青龍、治_レ風寒外壅、而閉_レ熱於經_レ者_レ、夫熱鬱於經_レ、而不_レ用_レ石膏_レ、汗為_レ熱隔、寧有_レ能發_レ之者_レ乎、此說本_レ于王文祿_レ、而殊為_レ協當_レ、又吳人駒云、發_レ散表邪_レ皆以_レ石膏_レ同用者、蓋石膏其性寒、寒能勝_レ熱、其味薄、薄能走_レ表、非_レ若_レ芩連之輩、性寒味苦而厚、不_レ能_レ升達_レ也、此說亦得、

此證惡寒にして渴無く、裏に熱有る者に非ざるを知るべし、石膏専ら裏を治すると雖も、

倘^{もし}麻黄と配用すれば、則ち相藉^{借り}り以て表分を走りて、其壅鬱^{ふさがり}を散ちらす、越婢湯の如き、亦然りと為す、要するに此湯證、太陽中に於いて、病最も重きと為す、故に麻黄を倍^二倍用せざるを得ず、唯其熱極鬱甚だしく、麻^{辛苦温}桂^{辛甘温大熱}を單用^{ことごとく用いる}するは、必ず兩陽相格^{阻害}の虞^憂有り、故に佐^{たす}けるに石膏^{辛甘・寒}を以てすれば、則ち鬱開き熱潰^{ついで}る、汗を作^なして解す、蓋し龍升^昇雨降の妙、温涼相併する處に在り、柯氏解く所、迥^{はるかに}前注に勝る、然れども猶未だ盡^{ことごとく}は為さず、尤氏醫學讀書記曰く、大青龍、風寒外壅にて、熱が經を閉^塞する者を治す、夫熱が經に鬱^{むす}びれて、石膏を用いざれば、汗が熱と為り隔^{へだ}たり、寧^{なん}ぞ能く之を發する者有らん乎、此說王文祿を本にして、殊に協^{かなう}當^{的中}を為す、又吳人駒云う、表邪を發散するに皆石膏を以て同^{ども}に用いるは、蓋し石膏其性寒、寒能く熱に勝つ、其味薄、薄能く表を走る、黄芩^{黄連}の輩、性寒味苦にして厚の如きに非ざれば、升^昇達能わざる也、此說亦得^{あたる}、

○校元和紀用經、陽粉散、謂病當^レ發^レ汗、而汗不^レ止、不^レ止則^レ入^レ陽、當^レ温^レ撲之^一、用^レ麻黄、藁本、白芷、米粉^一、末^レ之、以粉止^レ身汗^一、疑是龐氏諸家之所^レ本也、又三國志華佗傳注、稱有^レ婦人^一長病經^レ年、世謂^レ寒熱注病^一者、佗用^レ寒水^一汲灌、滿^レ百灌^一、佗乃使^レ然^レ火温^レ牀厚覆^一、良久汗洽出、著^レ粉汗燥^レ便愈、然則漢時神醫、多用^レ粉法^一、而未^レ知^レ兩夫子之方果是相同否^一、

○校案ずるに元和紀用經、陽粉散、謂^{考るところでは}病當に汗を發すべきも、汗止まらず、止まらざれば則ち陽を^入亡^{うしな}う、當に之を温撲^{打つ}すべし、麻黄、藁本^{コウホン・セリ科「神農本草經」}、白芷^{ビャクシ・芳香「神農本草經」}、米粉を用いて、之を末とし、以て粉^{おしろい}をぬる身の汗を止める、疑^{たぶん}是龐氏諸家の本とする所也、又三國志華佗傳注して、稱するに婦人有り長く病年を経る、世に寒熱注病と謂う者、華佗寒水を用い汲^{くむ}灌^{そそぐ}、百灌を満たす、華佗乃ち火を然^{もやし}牀^{ショウ・寝台}を温^ぬめ厚く覆しむ、良久^{とどこおる}汗洽^{あまねく}出、粉を著^け汗燥^{かわき}便^ち愈^ゆ、然れば則ち漢時の神醫^{名医}、多く粉法を用いて、未だ兩夫子^{先生}の方果して是相同否を知らず、○復服汗多者、表陽虛、故惡風、裏陽虛、故煩躁不^レ得^レ眠、汪氏以為^レ邪熱未^レ除、恐不^レ然、

○復^{さらに}服し汗多き者、表陽虛、故に惡風、裏陽虛、故に煩躁不得眠、汪氏以て邪熱未だ除れずと為す、恐らく然らず、

如^レ脈浮緩、身不^レ疼但重者^一、其機異而其情同者也、

*脈浮緩、身疼^{いた}まず但重き者の如き、**其機異にして其情同者也、

*太陽中九條「傷寒 脈浮緩 身不疼 但重 乍有輕時 無少陰証者 大青龍湯發之」

**機と情 卷一述敘参照

情の言猶性のごとし、蓋し病の寒熱虛實、皆之を情と謂う也、病機の字、本草經^{神農本草經}に見える、曰く「病を瘳^{いや}そうと欲すれば、先ず其源を察し、先ず病機^{*}を候^{うかが}う」と、蓋し邪の葱膠消長^{ショウチョウ・衰えと榮}、勢の緩急劇易^{ゲキイ・激しいことと穏やかなこと}、皆之を機と謂う也、

蓋邪迫^レ骨節^一、故脈緊身疼痛、今邪不^レ迫、故脈緩身不^レ疼、然身重而兼見^レ前條諸候^一、則知^レ是均屬^レ表鬱^一、但脈緩身重、疑^レ于少陰之脈遲身重^一、故徵以^レ乍有^レ輕時^一、^夏云^下

無_二少陰證_一者_上、而示_下精心體察、不_レ可_二輕試_一之戒_上、又麻黃湯證、亦必有_下邪不_二緊迫_一與_レ此同_レ機者_上、可_二推而知_一也、

蓋し邪が骨節に迫る、故に脈緊身疼痛、今邪迫らず、故に脈緩身疼まず、然れども身重にして兼ねて前條諸候を見_{あらわ}せば、則ち是均_{ひと}しく表鬱に屬すを知る、但脈緩身重、少陰の脈遲身重を疑う、故に徴_しる_しに乍_{たち}まち輕き時_有るを以てす、_更に少陰證無き者を云いて、精心_{一生懸命に考ふる}體察_{身をもって觀察する}、輕_{かる}がるしく試すべからざるの戒を示す、又麻黃湯證、亦必ず邪が緊迫せず此と同機者有り、推して知るべき也、

以上太陽病要領也、此他、得_レ病之初、有_レ所_レ挾者、有_下停飲相觸、治兼_二驅利_一者_上、

以上太陽病要領_{事物の肝要なところ}也、此他、病を得る初に、挾_さしは_さむ所の者有り、停飲相觸_{觸・犯}、治に驅利_{利水}を兼ねる者有り、

如_二喘家、及小青龍湯證之類_一、

喘家、及び小青龍湯證の類の如き、

有_下素稟_一虛弱、不_レ可_二徑汗_一者_上、

素稟_{ヒン・生まれつきの}虛弱、徑_{ただ}ちに汗すべからざる者有り、

如_二小建中湯、及尺中遲、咽喉乾燥等諸證之類_一、

小建中湯、及び尺中_{尺脈の部}遲、咽喉乾燥等諸證の類の如き、

又有_二風濕相搏者_一、並類_二列于後卷中_一矣、至_二其傳變_一、則裏之受_レ病、皆無_レ不_レ自_レ表、故其類不_レ一、或傳_二少陽_一、或直傳_二陽明_一、或直變_二太陰_一、或直變_二少陰_一、

又風濕相搏者有り、並後卷中に類列す矣、其傳變に至れば、則ち裏の病を受けるは、皆表自よりにあらざる無きも、故_{もと}より其類一ならず、或いは少陽に傳わり、或いは陽明に直に傳わり、或いは太陰に直に變わり、或いは少陰に直に變わる、

以上傳變、皆有_二明文_一、蓋本病變為_レ陰者、必多自_二桂枝證_一、其理何也、既是表疎、比_二之表實者、陽氣稍弱、故其重一等者、或須_二溫養_一、則其易_二變為_レ陰也、明矣、

以上傳變、皆明文有り、蓋し本病變じて陰を為す者、必ず多くは桂枝證に自よる、其理何也_か、既_レ是表疎、之を表實者に比して、陽氣稍弱、故に其重きこと一等者、或いは溫養を須_{もち}いれば、則ち其變じて陰と為り易き也_や、明らか矣、

但少陰直中、非_下經_二太陽_一者_上、而厥陰、則病之所_レ極蓋不_二自_レ此遽變_一也、

但少陰直中、太陽を經るものに非ずして、厥陰になれば、則ち病の極める所蓋し此より遽_にわかな變あらず也、

並是玩_二經文_一而自知、

並是經文を玩_{深く味わう}して自ら知る、

更_有下_二醫藥誤投、及宿病相觸_一、而變為_二諸證_一者_上、其緒甚_レ紛、今亦類_二列于後卷_一云、

更_更に醫藥誤投、及び宿病相觸_{觸・犯}して、變じて諸證に為る者有り、其緒甚だ_レ紛、今亦後卷に類列して云う、

方氏以来、立_二太陽三綱之說_一、以_二諸變證_一、原_二其來路、分_二隸于桂麻青龍三等_一、然仲景

之意、蓋不_レ若_レ 是其幾_一也、且姑舉_一證_一言_レ 之、如_一太陽中篇、眞武湯證_一、或自_一桂枝證、汗_レ 之如_一水流離_一、或自_一桂枝證、誤用_一麻黃_一、或自_一麻黃證、誤用_一青龍_一、諸般過汗、皆能變_レ 此、有_一一定_一乎、如_一方氏諸輩_一、專持_一偏見_一、以繩_一縛聖法_一、其害殆不_レ 為_レ 尠、學者宜_レ 勿_レ 被_一眩惑_一焉、

方氏^{方有執「傷寒論條辨」明}以来、太陽三綱の説を立て、諸變證を以て、其來路を原^たずね、桂麻青龍三等に分隸^{わけしたがわせる}、然れども仲景の意、蓋し是の若^{ごと}き其幾^{前兆}あらざる也、且^{そも}も姑^{とり}あえず一證を擧げて之を言う、太陽中篇の、眞武湯證^{「太陽病發汗、汗出不解・・」}の如く、或いは桂枝證に、之を汗し水流離の如きに自より、或いは桂枝證に、誤って麻黃を用いるに自より、或いは麻黃證、誤って青龍を用いるに自よる、諸般の過汗、皆能く此を變える、一定有る乎^{や・疑問}、方氏諸輩の如き、專^専ら偏見を持ち、以て聖法を繩縛^{ジョウバク・繩で縛る}、其害殆^{必ず}尠^{セン・少}を為さず、學者^{学ぶ者}宜しく眩惑^{くらましどわす}されることなかるべし焉^{断定}、

完 2009/07/30

訂正 2009/08/12